

創作オペレッタ「育児シンフォニー～かがやけ子育て～」の一考察 ——母子保健家族計画全国大会での発表をもとにして——

北 村 恵 子

I はじめに

平成5年の母子保健家族計画全国大会は、「明日を築く、今日の子育て」をメインテーマに9月21日から22日にかけて長野県松本文化会館で開催された。会場には全国各地から1,500人の関係者が詰めかけ、式典、功労者の表彰などのセレモニーの他、特別講演やシンポジウムなどが行われた。また、全国大会では初の試みとして、創作オペレッタ「育児シンフォニー～かがやけ子育て～」も併せて上演された。これは、長野県北信地域の保健婦達が自作自演したもので、筆者が全体指導と作曲・ピアノ伴奏を担当した。これは、計画された時点で既に関係者の間では呼び声が高く、オペレッタ形式による表現は対象者に強いインパクトを与えるということを、あらためて確認出来た。また、発表後の反応も非常に大きく、観劇した人達は言うに及ばず、その他の保健医療関係の人々の間でも話題になったようだ。また、全国組織の新聞などで大きく報道されたりしたため、県外からも長野県の関係者に好意的な感想が寄せられたり、ビデオテープの請求依頼があったという。

本稿では、このオペレッタ創作の経緯を、その計画立案から組織作り、創作過程、発表までについて述べ、併せて創作過程でのメンバーの心理的推移などについて考察することにより、オペレッタなどの総合芸術による表現形式の有効性及び、メンバーの人間的な成長などについて述べてみたい。

II オペレッタ創作の経緯

①計画立案及びその背景

母子保健家族計画全国大会は、厚生省、恩賜財団母子愛育会、日本家族計画連盟及び、当番県主催で毎年行われており、平成3年度の大分県、平成4年度の埼玉県に次いで、平成5年度は長野県で行われた。いずれの大会でも、2日間のプログラムの中にはアトラクションが入っており、大分大会では映画や湯布院源流太鼓、整肢園児童によるハンドベル演奏、埼玉大会では大正琴、合唱、踊り、幼稚園児の鼓笛、日本舞踊、ハクビ着付舞い、津軽三味線、秩父音頭などの披露であった。長野県における大会では、その主催者たる長野県が計画を立てることになったとき、関係者の一人S女史の発案で創作オペレッタをすることになった。それは、S女史が前任の長野県公衆衛生専門学校での音楽授業の創作オペレッタの活動を評価し、あるイ

メージを持っていたためと思われる。

さて、長野県公衆衛生専門学校では、保健婦学科、歯科衛生士学科とも筆者の担当する音楽の授業で創作オペレッタを実践している。詳細は次稿にゆずるが、何れも学生の目で捉えたテーマをもとに、ストーリー、脚色、作曲、動きや踊り、舞台構成など、苦勞してすべて創作している。音楽を専門にしている学生という訳ではないのだが、内々の発表会では、歌や音楽にのって繰り広げられる涙あり笑いありの、とてもユニークで素晴らしい作品が演じられるのが常である。テーマにはその時々世相を反映したものも多いが、中でも老人性痴呆症やいじめの問題が特に多い。またその他には、看護婦不足や過勞死、ダイエットの問題、若い夫婦の出産の意識、虫歯予防、塩分の取り過ぎについて、養護教諭の悩み、OLの貧血症、拒食症、保健婦の生き方、母親の育児手抜き、家族生活のあり方、糖尿病の食事制限、登校拒否、在宅看護の問題など、幅広いテーマが取り上げられている。

母子保健家族計画全国大会のアトラクションとして創作オペレッタが可能かどうかの長野県からの打診は、3月初旬であった。そして、オペレッタを創作するのは、筆者が指導出来る範囲の地域の保健婦達ということに決定した。

②組織作り

創作オペレッタの活動には大勢の人間が必要となるので、実行委員長、副委員長各1名、委員2名、協力者としての筆者の計5名の実行委員会がまず組織された。そして、その他北信地域の保健婦14名を含め合計19名のメンバーでスタートすることになり、「りんどうの会」と名付けられた。メンバーに決まった保健婦の中で、長野県公衆衛生専門学校の学生時代に創作オペレッタの経験のある人も多かったが、自分からどうしても参加したいという人は皆無で、上司から言われたか、職場で一番若かったりする人が殆どであった。そして、特に音楽や劇に関心を持つ人達の集まりでもないようであった。また、この計画を実施するに当たり、長野県公衆衛生専門学校の多大な協力が必要となった。

③創作過程

A. テーマ設定及び準備委員会の活動について

仕事を持ちながらの活動になるので、能率よく事を運ぶために、初めから全員集まって話し合いをするのではなく、実行委員でストーリーの内容やあらすじの方向性を持つことになり、計5回のミーティングが持たれた。実行委員他関係者で今後の予定やストーリーの概案などについて話し合われた結果、内容は日頃の保健婦活動における相談事例から、母子保健や育児に関する問題を取り上げることになった。この段階でのストーリーの骨子は次のような案であった。

◎第一回目（4月20日の準備会）

(1)学歴の高い夫婦のケース…華やかな結婚式のシーンから始まる。理想の結婚、妊娠中の会話、理想の育児、育児書が頼りの育児、その通りにならない現実、夫はエリート社員で仕事

にあけくれ家庭を顧みない、核家族、姑の参加を好まない、育児情報に振り回される母親、現実と理想とのギャップと夫の協力を得られない妻の育児不安などを盛り込む。

(2)駆け落ちした夫婦のケース…まだ遊びたいのに子供が出来てしまった、育児の悩みに人生を拘束されたくない、子育てに理想を持っていない、なりゆきで子育てをする、子供を置き去りにして遊びに出かけてしまう両親、家庭・育児のあり方が分からない両親が子供の変化やトラブルに考え込むケースなどを盛り込む。

(1)の場合も(2)の場合も、保健婦の訪問を受けて、母親、父親が問題に気付き変化していく様子や、育児は両親、地域、行政もかかわって育てていくものであり、また、子育ては明るい家庭が原点であることをアピールしていくことにした。また、題名の案が次のように出された。

・今、親が変わる ・楽しい子育て ・子育ては、今！ ・思いっきり子育て ・子供が好きですか ・どこが違うの、子育て ・今、子育てが変わる ・ママ、ボクを見て！ ・子育て「愛」 ・みんながあなたを愛してる ・子供と歩む

◎第二回目（5月7日の準備会）

前回の内容をもとに検討した結果、結婚、妊娠、育児の場面をケースごとにオムニバス風に紹介していくことにした。

○結婚式の場面…1) 若い夫婦のケース 2) 玉の輿にのったケース 3) 理想の夫婦（三高）のケース 4) ハイミスで結婚したケース 5) 離婚経験者の結婚のケース

○妊娠の場面…1) 望まぬ妊娠（遊びたいのに妊娠してしまった） 2) なかなか妊娠せず悩む（姑がうるさい） 3) 妊娠中の不摂生 4) 胎教にこだわる

○育児の場面…1) 放任のケース 2) 母性が未熟のケース 3) 英才教育に走るケース 4) 虐待や夫の協力が少ないケース 5) 過保護のケース

以上、結婚の様々なパターン、妊娠中の悪いパターン、育児に悩む母親やその心の変化のパターンなどの紹介の後、保健婦などを通して親子教室の仲間作りの場を知り、まずあなたが心を開くならば、周りを見渡すとこんなに多くの支持の手があるのだ、といった提言をしていきたいということになった。

◎第三回目（5月19日の準備会）

前回の案をもとに、具体的にどの例を取り上げるか煮詰め、さらに、育児書に振り回される母親の場面を付け加えることにした。上演時間は1時間以内ということなので、正味約50分をそのめどにし、出演者人数を考慮した上で脚本に取り掛かることになった。有難いことに、発表には参加しないが劇の脚本作りの好きな同僚保健婦の協力も得られることになった。

◎第四回目（6月4日の準備会）

前回の案をもとに、ストーリーの内容を煮詰めた。また、題名については「育児協奏曲―親の笑顔こそ子の安らぎに」という案が出ていたが、今回の大会のメインテーマが「明日を築く、今日の子育て」であるため、「育児シンフォニー～かがやけ子育て～」に変えた。そして、配役の割り振りや今後の練習計画について検討した。次回には、ある程度はしっかりした脚本を完成し、配役を決定することにした。

◎第五回目（7月8日の準備会）

実行委員長と筆者及び当日の舞台関係及び照明・音響担当者との打ち合わせ会とし、発表する舞台に関しての予備知識を得、さらに、効果的な舞台作りへのアドバイスを受けた。その結果、準備段階の脚本の大まかな点に手を入れることが可能になった。

B. 脚本作りについて

テーマが設定され、出演人数、発表時間などが明確になった時点から脚本作りが本格化していったが、先にも述べたように、実行委員の同僚で、発表には参加しないが脚本の原案作りを手伝いたいという者がいたため、計画案に沿った脚本作りがスムーズに進行していった。そして、原案を出演予定者に見てもらってからさらに手直しすることにしたので、内容紹介や読み合わせを重ねるうちに、脚本の大幅な手直しも必要になり、その度に脚本用のワープロ打ち直しが繰り返され、セリフや作曲との関係で歌詞にも変更が出てきた。最終的な脚本完成は9月の初旬であった。さらに、セリフや歌詞の細部については、発表少し前まで手直しが加えられることとなった。内容の概略は次のようである。

○ナレーション…日々の保健婦の仕事の中で出会った母親や子供達の姿をもとに、子育てのこと、母親、家族関係などについて感じたことを「育児シンフォニー〜かがやけ子育て〜」としてまとめ、三組のカップルを通して結婚、妊娠、育児の流れの中で悩みに直面しながらも成長していく様子を紹介し、観客の皆さんと一緒に考えていきたい、という内容。

○結婚編 （ ）内は登場人物

- (1)Aカップル（若い夫婦）…ディスコで知り合った20歳のカップルが、新婚旅行の行き先について話し合っている場面。
- (2)Bカップル（三高の理想の夫婦）…お互いの理想が一致したお似合いのカップルが、結婚後の生活や生まれてくる子供に夢を抱きながら式場に向かう場面。
- (3)Cカップル（マザコン夫婦）…新婚旅行の帰りに、出迎えた夫の母に夫が甘える様子に不安がる妻の様子場面。

○妊娠編 （ ）内は登場人物

- (1)A夫婦（妻、夫、医師、婦長）…初めての妊娠を知り、まだまだ遊びたいので子供なんて産みたくなないと嘆く、望まぬ妊娠の場面。
- (2)B夫婦（妻、夫、スナックのマスター、その客）…いつも夫の帰りが遅く、寂しさを紛らすためにスナックに出かける妻の、妊娠不摂生の場面。
- (3)C夫婦（妻、夫、姑）…結婚してから5年もたつのにまだ子供が出来ない夫婦に、姑がまだかまだかとせきたてるためイライラする妻の、待ち望んでいる妊娠の場面。

○育児不安の母（母親）…育児に不慣れで、本などの情報に振り回され不安がる母親の場面。

○育児編 （ ）内は登場人物

- (1)A家族（父親、母親、4歳の男子、3歳の女子）…父親と母親がパチンコに出掛け、淋しく留守番をする幼い兄弟が、やけどをするという場面。

(2)B家族（父親，母親，3歳の女子）…夫の協力を得られない妻が，子供に当たり散らし暴力を振うという虐待の場面。

(3)C家族（父親，母親，6歳の男子，祖父，祖母）…ようやく生まれた男の子が，皆にあれこれ言われ過保護に育てられている場面。

○まとめ編（ ）内は登場人物

ニコニコ教室（保健婦，A，B，C各家族の子供達と母親達，情報に振り回された母親）…保健所で企画された，2歳から就学前の子供達と母親が集う親子ニコニコ健康教室で，のびのびと遊ぶ子供達と，心を開いて語り合う母親達の場面。

○ナレーション…結婚，妊娠，育児の考え方は一人ひとり違っても，母として子を思う心，願いは変わらないと思われる。独りで悩んだりせず，心を開いて語り合い，子供達の声や心を優しい気持ちや笑顔で受け止められるようになることが，みんなの願いであるという内容。

C. 曲作り

曲作りはすべて筆者が担当した。脚本の大筋が決まり，音楽や歌の部分がはっきりしてくると作曲に入る。オペレッタは歌や曲の部分とセリフの部分で出来ており，そのバランスがとても大切である。登場人物の感情が高まったときは必然的に歌になるし，また，テーマ音楽や情景描写の曲，ブリッジ音楽及び背景音楽ともいうべき曲も必要になる。作曲に当たっては，歌詞の推敲，歌う人のキーの確認，ソロか二重唱か合唱かなど，多くのことを考慮した上で進めなければならない。曲作りは脚本が形になりだしてからすぐ始めたが，なかなか思うように進まず，また，演じる人が歌い易いようにするために多くの手直しもし，納得するまで作り直す必要が生じた。特にこのオペレッタの中心になるテーマ曲は，時間をかけて作り直した。このオペレッタで作った曲は12で，次の通りである。

1. テーマ曲「心を開いて」（合唱）
2. 結婚編A，B，Cカップルの登場場面での歌「新婚旅行は」「一流商社の」「楽しかった」（重唱）
3. A，Bカップルの退場前の歌「二人のために世界はあるの」「幼いころから夢見てきたの」と，C夫婦の美和の歌「私どうすればいいの」（独唱）
4. Cカップルの冬彦と美和の歌「とっても優しい僕のママ・私の旦那さま」（独唱）
5. 妊娠編のA夫婦「圭介，エミは20歳」とC夫婦の「結婚してからはや5年」（独唱と合唱）
6. A夫婦エミの歌「困ります先生」とC夫婦の姑の歌「でもあなた美和さん」（独唱）
7. A夫婦の歌「まだまだ遊んでいたい」とB夫婦の「どうしていけない酒タバコ」（独唱・合唱）
8. B夫婦妊娠不摂生の歌「お酒でまぎらすみゆきさん」（合唱）
9. 情報に振り回される母の「生まれるまでは」「どうしよう」（独唱）
10. A家族の兄弟・良介，るみの歌「いつもいつもどうして」，B家族の女の子・ゆみの歌「いつもいつも怒る」，C家族の男の子・幸一の歌「ぼくはまだまだ眠くない」（独唱）
11. B家族のゆみの歌「かわいいかわいいゆみちゃんは」とC家族の幸一の歌「年長さんの幸ちゃんは」（合唱）
12. ニコニコ教室での子供達の歌「お母さん！」（独唱と合唱）

また，情景描写や背景音楽などには，この12曲のメロディーを場面に合わせて使い分けた。

D. 練習

脚本や曲が出来上がると、セリフ、歌、踊り、動きなどの練習が繰り返されることになった。また、練習しながら言いにくいセリフを直し、その場を構成するメンバー及び他のメンバーによって、歌いにくい曲に手を入れ、踊りや動きを考案し、その場面を効率よく且つインパクトの強いものにするために、お互いに工夫し合う作業が続いた。練習すればする程工夫しなければならない点が多くなって来るようでもあり、当初計画した8回（各4時間位）の練習では、納得するものにはならなかった。そこで、メンバーの中から自主的な練習の申し出があり、6回（各4時間位）の追加練習日が設定された。仕事を持ちながらの練習は、個人としても職場としてもかなり無理をしないと出来ないと思われるが、メンバーの器量で上司の理解を得、自分の都合をやりくりして練習に参加し、誰も泣き言を言わなかった。グループ活動、特に仕事を持つての場合は、個人的な理由は後回しにされる傾向にあるが、結婚を間近に控えた者、家族に幼児や老人や病人を抱えた者もあり、ただでさえ大変な練習を乗り切ったことは、メンバーのやる気以外の何ものでもないと思われた。発表日が決定しており、しかも全国大会という場、そして、誰一人として経験したことのない大ホールでの発表ということが大きなプレッシャーとなっていたようである。ともあれ、回を重ねる度に納得のいく場面構成になっていった。また、素人のメンバーに、表現の仕方について指導してくれた劇団所属の同僚保健婦の存在は大きく、劇表現のノウハウの理解につれて演技が上達していった。歌については、場面ごとのメンバーが集まり様々な場所で練習した。合唱は、演技の練習に入る前に全員でやり、部分的に特に取り出して歌うことなども加えた。踊りや動き、場面構成は、原則として演じる本人が工夫することにしたが、周りで見ている仲間全員で意見も出し合い、更なる工夫を重ねた。

E. 発表

発表は、1993年9月21日（火）午後2時30分より約1時間、松本県民文化会館ホールにおいて行われた。観劇者は日本各地からの凡そ1,500人位であった。前日同じ場所でリハーサルが行われる予定であったが、手違いで中ホールに変更になり、位置関係、照明関係、音響関係を一度も確認出来ないままに本番を迎えることになったため、感が掴めず不安を抱いての発表となったが、県内第一級の舞台関係担当者がかかわってくれていたためすべて任せ、演技に集中することが出来た。前日の宿泊に際しては、劇中に出てくる3パターンの家族ごとの部屋割りとし、発表に際しての不安箇所について納得するまで練習、確認出来たことは、発表への集中に大いに役立ったようである。また、舞台小道具や衣装などもすべてメンバーでやり繰りして持ち寄り、大道具も必要なかったので、舞台装置上の混乱はなかったと思われる。背景画は使わずシルエットなどを駆使した照明でカバーしたが、照明の出来不出来で発表の優劣が左右されることもあるので、優秀な舞台関係者が担当してくれたのは幸いなことであった。さらに、素人集団の創作発表に際しては、当日担当の舞台装置関係者らとの、計画初期からの協力態勢が重要であることを改めて確認出来た。

発表寸前の楽屋には緊張感が溢れていたが、精一杯練習してきたことへの居直りとも言うべき雰囲気があり、成功を予感させた。効果音として駅プラットフォームの音、赤ちゃんの泣き声などもあったが、その他の伴奏などは筆者がピアノで担当した。

発表は今までの内の最高の出来であったが、後で聞けば、照明が自分の顔に当たると客席が全然見えないので居直り、上がらずに自分を出せたということである。また、意外なところで自分のセリフや歌に反応する観客に快感すら覚え、どうせなら観客に受けるように巧くやってやろうという気持ちにもなったようだ。発表後の楽屋では、成功したという安堵感や、やっと終わったというホッとした気持ちや、練習時とは違った仲間の演じる舞台上でのちょっとしたハプニングの話題で持ちきりだったりした。そして、発表を見てくれた関係者や他県からの楽屋訪問者、新聞記者のインタビューなど、非日常の興奮が渦巻き、その興奮がメンバーの気持ちをあおっていったことも事実であるが、成功感、成就感を肌で実感したようだった。

III アンケート調査による創作過程での心理的推移

筆者は発表終了後、この創作オペレッタの創作過程での心理的推移を調べるために、筆者を除く18名のメンバー全員に、郵送によるアンケート調査を実施した。回収率は18名中17名の約94.4%であった。以下、質問事項に沿って考察していくこととする。

A. メンバーの所属・年齢について

メンバーは、北信地区の県保健所関係の保健婦7名、市役所所属の保健婦10名、長野県公衆衛生専門学校教師1名の計18名である。実行委員は保健所では係長、課長補佐、主査などの立場にあり全員が40代、その他のメンバーは全員20代であった。

B. この活動に参加することになった経緯について

これは県主導の企画であったために、参加の経緯は殆どが職場の上司からの依頼であったようだ。選ぶ基準としては、若手や独身者で長野県公衆衛生専門学校を卒業し、創作オペレッタの経験のある者というのが多く、事実、今回の調査でも、18名中13名の約72.2%が経験者か若しくは関係している者という結果であった。長野県公衆衛生専門学校での創作オペレッタは1983年から実施しており、既に10年を経過していたこと、また、過去において新聞記事になったこともあるなど、徐々に関係者の間で知られる存在になりつつあったこともその一因と考えられる。上司からの依頼で活動に参加したため、この活動に対して職場の協力が得られ易かったようであった。反面、やりたい者を募るという態勢ではなかったことも事実である。しかし、県主導でなかったならば、このようなチャンスと援助は得られなかったことと推察される。

C. 練習過程での気持ちの変化について

初顔合わせから練習及び発表当日まで合計14回の集まりを持ったが、その時々活動におけ

る気持ちについて個々に記述してもらったので、その心理的推移について考察を試みたい。

◎1回目 7月12日(月) 午後1:00~5:00 於・長野保健所 内容(顔合わせ、ビデオ試聴、役決めなど)

【記述からの抜粋】

- ・顔を合わせるメンバーも初めてで不安が強い。どんな役が回ってくるのか緊張する。出来れば大役はやりたくないという思いが強い。オペレッタの経験がないので、ついていけるかと不安で仕方がない。
- ・いいことだとは思いますが、自分がやるのはどうも心配だ。カラオケも歌わない位なのにどうしよう。
- ・本当にやるんだ! 嫌だなあ。自分はどうせ男役だし…。とにかくやればいいんだ。
- ・果たして私達に何が出来るのだろうかと先が見えない状態で、自分自身オペレッタを作り上げていくという自覚が全くなかった。役もどれでもいいわという感じだった。
- ・脚本を見るのも初めてで、どんな役をやりたいのかも分からないのに、よく知らない人達と役を決めることが出来るのだろうか。
- ・企画の側からは、初日から欠席の人もいて心配であった。また、なぜ自分が選ばれたのか理解出来ないような人もいて、人ごとのような感じを受けた。
- ・役決めの中で、皆の積極的な様子を見てそのパワーに押され、やる気が湧いた。ビデオ試聴でイメージが湧いた。
- ・役決めは「えー!、もっと簡単なのがいい」というようなことを言うかと思ったら、みんな積極的で驚いた。

【考察】

第1回目はメンバーの初顔合わせであり、実行委員長によるこの企画の主旨説明及びメンバーの自己紹介、長野県公衆衛生専門学校での平成5年度の創作オペレッタのビデオ試聴の後、脚本原案が配布され、配役を決めることとなった。しかし、脚本自体がまだ完成されたものではなく、また、お互い顔も知らない者ばかりで、役にピッタリという人物を選考するという訳にはいかなかった。しかし、制約された練習機会や時間内では、しなければならないことが多く、仕方がないことのように思われた。記述からも分かるように、この段階では、企画側にもやる側にも相当な義務感が支配しているようであった。なお、ここで一応決められた配役も、脚本の変更により変わることもあり得るということで諒解を得た。メンバーの中には長野県公衆衛生専門学校時代に、筆者と一緒に創作オペレッタを経験した人が多かったが、その時の最初の反応と近似しており、この人達がどのように変容していくか楽しみでさえあった。

◎2回目 7月23日(金)、◎3回目 7月26日(月) いずれも午後1:00~5:00 於・長野県公衆衛生専門学校 内容(脚本原案の詰め及びセリフや歌詞の推敲など)

【記述からの抜粋】

- ・自分ではどんなものでもよいと思っていたが、他のメンバーが真剣に検討しているのを見て、思っている以上に大きい企画なんだなあと感じた。
- ・自分が演じるという実感がまだつかめずにいた。また、どこをどうしたいなどと考えていなかった。シナリオは一通り読んでいたが、“なかなか面白いなあ”と、第三者的立場でしか考えていなかった。
- ・ストーリーに関して皆と意見が合わず納得出来ないため、文句ばかり言っていた。大丈夫かなあと心配だった。
- ・脚本の手直しが中心で練習に入れないのが心配だが、でも、後で脚本を直すことになればもっと大変なので、納得するまでやらなければと思った。
- ・台本を手にした時、歌あり踊りありセリフありで、自分に出来るのかと心配だったが、配役が決まりグループごとに原案の詰めをした時、色々なアイデアが出てきて自分の想像も膨らみ、なんだかワクワクした楽しい気分になった。
- ・より良いものをとという気持ちはあるのだが、シナリオが何回も変わって、その度に大変だった。シナリオはしっかりしたものがあり演じる方がよい。
- ・皆であだこうだ言いながら手直ししていくことは、とても楽しかった。

【考察】

2回目で脚本と役柄の変更が必要となり、3回目で確認作業に入った。メンバーが自分の役柄をこなすに当たって、無駄なセリフや不自然な部分などについて真剣に意見交換した結果、かなり多くの手直しがなされることとなった。この段階ではまだ第三者的な考えの者、脚本の手直しに時間の掛かるのが苛立たしい者、皆で原案の詰めをする作業を楽しむ者など、色々なタイプがあることが分かる。しかし、実行委員側のあせりも感じられ、全体指導者としての筆者に、もっと厳しく主導権をにぎって欲しい旨の申し出もあったが、創作オペレッタの場合ここが最も重要であり、納得するまで話し合いがされることこそ、次への最短距離であることを話し、納得してもらった。ここで我慢が出来ず指導者が手を出すと、後々まで不満が残ったり、後で大幅な手直しを強いられることを、筆者は経験的に知っているのので、じっと我慢して見守ることを心掛けた。

◎4回目 8月13日(金) 午前8:30~12:00 於・長野県公衆衛生専門学校 内容(セリフ、歌、演技などの直しと練習)

【記述からの抜粋】

- ・グループによって話し合いがスムーズに行かない所があるかに見え、心配である。
- ・まあ、ボチボチ始めようかな。そのうちに気持ちが湧いてくるだろう。
- ・歌、セリフ、演技の練習をやってみると意外と楽しいし、ストレスも発散出来すっきりする。
- ・セリフの読み合わせで終わってしまったようで、このままで大丈夫かなと思う。
- ・自分の役のイメージが掴みにくく、セリフを言うにも抵抗がある。一通りは出来たけれど、

何か違う。どうしよう。分からない。浮いてしまっているようで何かしっくり来ない。

- ・自分のグループ内や先生との検討により、皆の気持ちが徐々に固まってきたようだ。
- ・困ったなあ、大変だなあ、嫌だなあという気持ちがあり、練習にも本腰が入らなかった。出来ることなら出番の少ない役に変えて欲しいと、まだ思ってしまう。
- ・初めのものと随分変わってしまい、その過程に加わらなかった者としては、あたふたと戸惑ってしまった。自主的にグループで練習時間をとってもらったが、雰囲気はとても良くなっている。

【考察】

脚本が大体決まった段階でグループごとの練習に入ったが、自分の役柄についてのイメージを膨らませることに気持ちがいく者もあれば、まあボチボチ始めようかという者、未だに嫌だと思っている者、ストレス発散の手段にしている者、進行の遅いことを心配している者など、メンバーの個々の感じ方がかなり違うことに驚かされる。

◎5回目 8月17日(火) 午後5:00~8:30, ◎6回目 8月22日(日) 午前8:30~12:00
いずれも於・長野県公衆衛生専門学校 内容(歌、場面ごと、通しの練習など)

【記述からの抜粋】

- ・一回通すと結構時間がかかり、メンバーの個性や思いに接することなく時間が過ぎていってしまう。この配役で良かったのだろうかなどと悩む。
- ・セリフがなかなか覚えられず、イメージがまだ掴めない。こんな感じかなと、あまり切迫感がなかった。
- ・形式的な練習に終わってしまい、役になり切ることなどまだまだの感じである。
- ・場面ごとの工夫はとても楽しかったが、まだイメージがふらふらしており、良いアイディアもなかなか思い浮かばなかった。自分の役柄に近い街を歩いている若者の観察をするようになった。
- ・こんな状態で発表に間に合うのかな、練習を始めるのが遅かったのではないかと思う。
- ・歌やセリフを覚えられないのは量が多すぎるからだ、という不満を感じていた時期を通り過ぎ、練習をしなければならぬという気持ちに変わってきた頃である。
- ・表現したい部分が思うように出来ず葛藤があった。
- ・自分の場面だけでなく全体が見えてきたので楽しくなってきたが、もっと工夫が必要であると感じている。
- ・いくつかアイディアが浮かび、演技を色々工夫してみたが、定着する程にはならなかった。

【考察】

そろそろ本気にならなければという気持ちと、どうやったら巧くいくのだろうかという気持ちが、個々のメンバーの中で葛藤し始める段階に来ているようである。どんな創作に於いても、目標に向けて悩み惑う過程が必要であるが、グループ活動の場合、この段階では大勢のメンバーと気持ちを一つに揃える所まで到達することは、至難の技であると言えるだろう。それ

ぞれの記述に、自分自身の気持ちの持ち方に対しての疑問や、思うような表現を創り出すための悩みが感じられる。また、今回は長野県民文化会館大ホールでのリハーサルがあるので、それまでに何とかして間に合わせたいという焦りの気持ちと、人の前に立って演技することにまだ恥じらいや抵抗を感じている者もあった。日曜日の自主的練習となったので、欠席者も多く気が抜けたと記述する者もいた。

◎7回目 8月26日(木) 午後1:00~5:00 於・長野県民文化会館大ホール 内容(通しと位置確認)

【記述からの抜粋】

- ・セリフも位置関係についても不十分で、見てもらうのも悪い感じだった。しかし、この経験が“このままじゃ駄目”という気持ちを起こさせてくれた。
- ・最悪の気持ち。まだ皆が“やらせられている”感が強く、気持ちが乗ってこないのが痛い程よく分かる。どうしたらいいのだろうか。
- ・この段階で大ホールで練習しても意味があるのかな、という疑問があった。反面、ホールの大きさにびっくりし、あと一ヶ月しかないのに場面作りはどうしようという漠然とした不安が湧いた。
- ・大舞台を借りてもらったのにもかかわらず、セリフ、歌をしっかりと覚えていなかったことが凄く情けなかった。見てくれた舞台担当者から遠慮がちに“演技を大きく、セリフをきちんと覚えて”と言われて、どれだけ自分の演技・考えがいい加減であったのか思い知らされた。
- ・人がいなかったせいで、舞台に立っても“こんなものか”という感じで、大きな驚きはなかった。舞台でやってみて実感が湧き、見当がついた。お陰で皆真剣になってきたように思う。

【考察】

発表当日にかかわってもらった舞台や照明関係の担当者に演技を見てもらい、舞台作りや場面作りのアドバイスをしてもらった。内容的にも気持ちがまだ煮詰まらず練習も不十分な段階であったため、メンバーの衝撃は大きく、かなりのショックを受けていたようである。反面、本気になるための刺激としての効果は大きく、大半のメンバーは“なんとかしなければ”と、追い詰められた気持ちになったようだ。中には大ホールが予想に反してさほど大きく感じなかったという者もあり、位置関係の確認や、役に気持ちを投入するために効果があったということであった。

◎8回目 9月1日(水) 午前8:30~12:00 於・長野県公衆衛生専門学校 内容(場面ごと、通しの練習、新聞取材)

【記述からの抜粋】

- ・この時期に新聞社の取材があったことは、結果的にとても良かった。まだ十分ではないが、

いよいよ現実なんだと思い始め、外から期待されていることを実感する。発表まであと少ししかないが、大丈夫だろうか。

- ・前回のホールでの不安や緊張がまだ残り演技に固さがあるが、あの時の練習を生かしてセリフをしっかり覚えるようにしたい。
- ・取材が来るということで“人に見られる”ことを意識し始めた。ホールでの練習を生かして、視線や動きや指先などに注意するようになった。
- ・ホールに立ったので位置を意識して練習するようになった。皆と一緒に動きやセリフの工夫をしたり練習することが、とても楽しくなってきた。
- ・取材の人が“涙あり笑いありで、いいね”と言ってくれたが、見ている人を感動させたいと思った。

【考察】

新聞社による練習風景の取材があり、良い意味で刺激になり励みになったようである。自分達以外の存在を意識することにより、練習にも熱が入るようになった。このあたりから演技にも真剣味が加わり、更なる工夫も加えられていった。しかし、実行委員の心配は大きく、役柄に成りきれないメンバーにやきもきする姿が見られた。

◎9回目 9月4日(土) 午後2:00~6:00 於・長野県公衆衛生専門学校 内容(場面ごと、通しの練習)

【考察】

8回目とほぼ同じことが繰り返されたが、うまく仕上がっているグループと心配なグループとの差があり、また、真剣味が感じられない人がまだ少数いることなど、実行委員の不安をかき立てた。筆者は、この段階で劇団所属の同僚保健婦の指導を依頼したい旨の申し出を実行委員から受けたが、まだ全員の役作りが出来ていないので、次回まで待ってもらうこととした。その理由は、自分の中に役に対しての確たるイメージを持たない人の場合、特に何も感じずに指導された通りに表現することになる可能性があり、個々の成長が望めないと思うからである。

◎10回目 9月7日(火) 午後5:30~8:30 於・長野県公衆衛生専門学校 内容(通しの練習と演技指導)

【記述からの抜粋】

- ・演技指導を受け何か吹っ切れた感じがおり、自分の思う通りにやっていたと思った。
- ・素人劇だと思っていたが、ストーリーの流れなどについて劇団の人に意外にも褒められ、とても嬉しいし自信を持つことが出来た。
- ・演技指導を受けて随分参考になった。セリフの前後には思いとか気持ちがあつて、小さな演技でも必ずそうなる必然があること、タイミングのよい間が必要であることなどを教えてもらって納得した。それ以後、自分の役の人間はどういう人間性を持ち、どういう生き方・考

え方をしているのかを考えるようになった。

【考察】

前回の実行委員からの申し出の通り、劇団に所属して専門的に演劇活動をしている同僚保健婦の指導を受けた。これによって、自分が演じる役の性格、考え方などに思いが届くようになり、それにつれて、セリフや仕草に深みが増していった。役作りについてはそれまでもアドヴァイスしてはいたが、今回のような模範を示しての具体的な指導は、口で言うだけの指導とは重さが違うようであった。

◎11回目 9月16日(木) 午後1:00~5:00 於・長野県公衆衛生専門学校 内容(総練習, ビデオ取り)

【記述からの抜粋】

- ・目の前に迫った本番を前に、自分の演技にも自信が持て、徐々にコツが掴めてきたように思う。
- ・他のグループを見ていてもハッとする程上手になってきている。自分も頑張らねばという思いで一杯である。
- ・練習すればする程仲間との親近感が増し、とても楽しい活動という気がしている。お互いに意見を言い合って、不安な部分が解消していった。
- ・自分ではよく出来たと思った練習のビデオを見て、自信喪失してしまった。しかし、人に見てもらうためにはもっと工夫したり、自然な動きを研究しなければならない。

【考察】

長野県公衆衛生専門学校の学生の有志が合唱を手伝ってくれることになったので、この総練習から加わってもらった。合唱が充実すると、つられて独唱、重唱もよくなるのが不思議である。また、発表に向けて頑張りたいというメンバー全員の気持ちが、この段階ではっきり出てきていることが実感出来た。

◎12回目 9月18日(土) 午前8:30~12:00 於・長野県公衆衛生専門学校 内容(総練習)

【記述からの抜粋】

- ・最後の総練習なので、休むといていた人も出てきてくれ、皆の気持ちが一つになってきて良かった。
- ・これだけ練習したのだから大丈夫という自信がついた。化粧の練習をしたりして、もう気分はウキウキ。
- ・衣装を付けて練習すると気持ちが入り、皆の目も気にならなくなった。以前のような照れがなくなり、もう真剣そのもので、楽しい場面では楽しくなるし、悲しい場面では本当に悲しくなった気がした。もう大丈夫。

【考察】

やるだけやったという満足感と開き直りの為か、皆の表情がとても真剣で明るく感じられる

ようになった。役作りや演技にも上達の後が見られ、発表の成功が予感出来た。また、人間的な成長も認められるようになってきた。

◎13回目 9月20日(月) 午後5:00~9:00 於・長野県松本文化会館中ホール 内容(リハーサル)

【記述からの抜粋】

- ・全体に一つにまとまってきた感じ。気分も高揚し、適度な緊張と演技することの楽しさでとても High な気分。リハーサル室の鏡で練習した時、目線や表情を客観的に確認出来たのでとても参考になった。
- ・大ホールでの練習は出来ず、位置関係やマイクの使用に不安が残るが、それでも演技には自信がある。

【考察】

発表前日のリハーサルは、希望通りの場所で出来なかったので少し不安が残ったが、それでも自信を持って発表出来るという雰囲気が皆にあるように感じられた。

◎14回目 9月21日(火) 午後2:30~3:30 於・長野県松本文化会館大ホール 内容(本番)

【記述からの抜粋】

- ・本番前、さすがに緊張してきて口数が少なくなり、顔もひきつりドキドキしてきた。しかし、いざステージに立つとライトが眩しく観客の顔が見えない分、安心して演ずることが出来た。
- ・化粧をしっかりと感情移入を心掛けた。出来るだけリラックスした気分でいられるように、冗談を言い合った。本番のナレーションが始まると手に汗を握り冷たくなったが、練習を重ねてきたので度胸も据わり、スポットライトもとても気持ちよく感じられ、観客の笑いが嬉しかった。
- ・照明や道具の出し入れ、着替えの場所や時間が思った通りにいかず、リハーサルは同じ場所でやらなくてはいけないと思った。他のメンバーが今までで一番いい演技をしていたので、負けられないと思って影響を受けた。
- ・初めのグループの熱演をモニターで見て、よし自分もという気持ちが湧き上がる。舞台に出たら笑いが起こったので“つかみはOKだ”と思ったら緊張も取れ、もっと笑いを取ってやろうなどと思ってしまった。
- ・緊張!の一言。しかし、若い人はアドリブを入れたり、演技に技が入ったり、燃えている感じだった。

【考察】

記述にもあるように、発表に際しての緊張感が漂う中にも、練習通りにやればいいのかという自信がうかがわれ、ライトの光で客席が見えないことも手伝って、堂々とした演技で会場を沸かせる余裕まで感じられた。他のメンバーは、どの場面でもあたかも自分が演じているように手

に汗をにぎって見守り、目標に向けて全員が一つになって息を合わせたということが、成功の要因であったと思われる。また、演じることの気持ち良さも満喫し、まるで女優の気持ちだったと述べている。

以上、アンケートの記述からメンバーの心理的推移を見てきたが、この2ヶ月間のメンバーの成長には目を見張るものがある。1回目の初顔合わせでの他人事のような感じと、14回目の発表の燃えている感じとの間に様々な思いが渦巻き、それぞれ葛藤もあったに違いない。アンケート記述から拾った言葉の抜粋だけを見ても、回数を重ねるごとに悩み、惑い、苦しみのトンネルから抜け出していく様子が分かる。目標を共有し、自分達で悩みながら作り上げていく活動を通して、自分自身ときちんと向かい合い、しっかり見つめることの出来た者は、確実に一步成長しているのである。そして、発表の満足感、成就感が次への意欲へとつながっていくことが、記述から確実に読み取れるのである。

さて次に、この作品をメンバーはどのように評価し、何を得たのだろうか。再びアンケート調査の記述からの抜粋を紹介しながら考察して見たい。

IV 「育児シンフォニー～かがやけ子育て～」の作品としての評価について

A. ストリーや全体構成について

【記述からの抜粋】

- ・3パターンのオムニバス風の表現であったが、全体構成も良く、一つひとつに話題性があり良かった。
- ・涙あり笑いありの場面展開につれ、内容的に考えさせられるテーマが適所にあり、良かったと思う。
- ・最初はモザイク的で繋がりが分かりにくいと思ったが、個性を強くし、ナレーションで説明を加え、インパクトの強いものに仕上がったと思う。短編で却って飽きずに見てもらえたのではないかな。50分という時間も丁度良かった。

【考察】

全員が苦勞して作り上げてきただけに、全体に丁度良かったという者が殆どであった。創作途中でメンバーの意見が集約され、制約の範囲ではこれしかない、という所まで煮詰められたことが、納得のいく作品となったものと思われる。

B. 曲や歌について

【記述からの抜粋】

- ・難し過ぎず簡単過ぎず、曲数も適当で、場面や気持ちにとっても合っていたと思う。テーマ曲の“心を開いて”は名曲です。

- ・同じメロディーを使っているのに、歌詞やテンポを変えると全然違った曲のように聞こえた。
- ・歌と演技と一体になって、観客や演じている者にインパクトを与えた。音楽の存在は素晴らしいと思った。今でも家族が口にする位である。
- ・音楽は言葉、動作、表情で表せない、感情やストーリーの流れなどを有効に伝えてくれる力を持っていることを実感した。

【考察】

歌は12曲、その他に背景音楽やブリッジ音楽（歌のメロディーを編曲したものが殆ど）を筆者が作曲したのだが、概ね好評であった。中でもテーマ曲“心を開いて”は、オペレッタの場を離れても喜んで歌ったようだ。

C. 演技・セリフ・衣装・化粧について

【記述からの抜粋】

- ・演技はもっとオーバーに、セリフははっきりと、衣装はもっと派手にすれば良かったと思う。化粧は自分達で工夫してやったが、とても楽しかった。
- ・各人工夫して上手だった。これが創作の醍醐味、手作りの味である。

【考察】

演劇には素人のメンバー達だったが、それでも工夫してそれぞれ楽しんで出来たようである。衣装や化粧は、気分も High になり、一言で言えばまるで女優気分といった感があり、満足していたのだと思われる。

D. 舞台や照明について

舞台や照明関係はプロの担当者に任せたので、メンバーからは特に意見はなかった。ただ、リハーサルで照明合わせの時間が取れなかったので、本番までどうなるか分からず不安だったようである。しかし、結果はとても素晴らしかった。

さて次に、自分が実際に舞台上で演じてみてどう感じたかについて、記述より考察して見たい。

E. 大舞台で演じての感想について

【記述からの抜粋】

- ・こんな経験は最初で最後だと思うが、やれば出来るんだという自信が持てた。歌手や俳優がやみつきになる気持ちがなんとなく分かった。
- ・いい気持ちだった。思いがけない観客の反応もあり、練習では味わえない素晴らしさがあった。
- ・皆の前でライトに向かって歌う、話す、演技することは、凄く気分が良い。貴重な体験であった。

- ・違った自分を発見出来た気がして、とても気持ち良かった。もう終わってしまったかと思うと淋しい。

【考察】

自分が演じた大舞台での得難い経験は、全員が気持ちの良いものであったと記述している。そして、出来ればもう一度やりたいという願望を持つようになっている。

F. 新聞記事に載ったことについて（9月4日の『信濃毎日新聞』朝刊）

【記述からの抜粋】

- ・マスコミが取り上げてくれたことで皆に“やるぞ”という気持ちが沸いてきたように思う。発表当日に載るよりも意義は大きく、いい時期に載ったと思う。また、職場や家族の協力が得られるようになった。
- ・記事を見た色々な人から「新聞見たよ、オペレッタ頑張って」と声を掛けられ、反響の大きさに驚いている。自分ではそれ程凄いことをしている実感が掴めなかった。マスコミの力は凄いと感じている。
- ・自分達の活動の一部が評価されたようで、とても嬉しかった。保健婦が今何をやっているのか、母子保健家族計画全国大会とは何かについて、住民へのアピールになった。しかし、写真に自分が写っておらず少し残念だった。

【考察】

マスコミの力の大きいことを実感したようである。自分達がやっていることが評価されたことに大きな喜びを感じた一方、周りの人達が良い意味のプレッシャーとなり、頑張る気持ちを持たせてくれたものと思われる。新聞に載ったことで、全国大会での発表は大変大きなことなのだという意識を育ててくれたようである。

G. 観客や見てくれた同僚の反応について

【記述からの抜粋】

- ・全県下から未だにお褒めの言葉をもらっている。テーマ、ストーリーなど、今の問題や話題を的確に捉えており、この全国大会を盛り上げた大きな要因であると言われた。
- ・内容が自分の家にもあり得ることで身近に感じられたし、身に迫るものがあったなど、良い評価を各所からもらっている。
- ・上手だったよ。どうしてやることになったの？（他市町村の保健婦より）
- ・保健婦がやったすべて手作りということに意義がある。もっと多くの人が見ると良かった。何かの機会にまたやるといいのと言われた。
- ・素人の保健婦がやったのに、あんなにきちんとした発表になるとは思わなかった。ここだけではもったいないから、是非続けて欲しいと言われた。
- ・これ程凄い反響が来るとは思わなかった。本番前には自分で演じていても面白いとは思ったが、こんなに皆がいいと言ってくれるとは思わなかった。

【考察】

発表については、自分達でも巧くいったという実感を持っているのだが、素人集団が頑張ったという評価を得られればいいというつもりが、思いもかけない好評価にとまどっているところがあるように思われる。事実、反響は大きく、全国からの観客に相当なインパクトを与えたようだ。

さて、一つの目標に向かって一緒に悩んできた仲間との素晴らしい人間関係を築き上げたメンバーは、何を、何をどう生かしたいと思っているのだろうか。

H. この活動から得たり感じたりしたことについて

【記述からの抜粋】

- ・皆で頑張り目標を達成した充実感を味わうことが出来た。一緒に努力すれば住民の行動変容も出来るのではないかと実感した。
- ・行政にいと命令で動くことが殆どなので、自主的に仲間と共にものを創り上げる楽しさは格別だった。
- ・オペレッタは人の心を揺り動かす有効な保健指導表現の一つになり得る。また、その役になりきることによって、いろいろな人の気持ちが分かり新たな発見が出来るので、健康教育や保健婦活動にも取り入れていけそうである。言葉だけでなく歌、踊り、動きで表現すれば、雰囲気もなごやかになるし集中してくれと思う。
- ・何もないところから自分達で一つのものを作り出したことは大きな自信に繋がった。何か熱中出来るものが見付かり、不思議なパワーが生まれ素晴らしい日々だった。小学校以来の音楽嫌いが大きく変容し、音楽が大好きになった。保健婦活動の相談の場に是非生かしていきたい。
- ・大勢で一つのことを手掛けるにはチームワークが大切。他人を変えるには自分が変わる必要があること、本気になると周りの者（物）への見方が変わり、逆に周りからの評価や反応も変わってくるということを、この活動を通してしみじみ感じた。

【考察】

創作オペレッタを実際に体験したからこそ言える、ということが記述されていた。筆者は創作オペレッタの実践意義についてメンバーに語ったことは一度もなかったが、彼女らは見事にその意義を体験から感じ取ってくれているようだ。保健婦活動に直接役に立つという訳ではないが、ものの見方や考え方、生き方を変容させることで、この経験を生かしていこうとしているかのようである。オペレッタのような総合活動を経験したことで、目標を達成した充実感を味わったり、自主的な活動に喜びを感じたり、演じた役柄の体験が他人の気持ちを思いやることに繋がったり、不思議なパワーによって新しい自分を発見している。また、音楽嫌いが直ったという者さえあった。この活動が、いずれ直接、間接に保健婦活動に生かされていくことを期待している。

V ま と め

平成5年の母子保健家族計画全国大会が「明日を築く、今日の子育て」をメインテーマとして、9月21、22の両日にわたり長野県松本文化会館で開催され、そのアトラクションとして長野県の保健婦達による創作オペレッタ「育児シンフォニー〜かがやけ子育て〜」が上演された。本稿はその計画案の段階から組織作り、創作過程及び発表までの経緯について、メンバーの心理的推移などを中心に考察を加えたものである。過去の母子保健家族計画全国大会の記録を見てもアトラクションは必ず入っているが、保健婦による創作オペレッタが上演されたことはなく、全国大会初の試みということで、計画の段階で既に関係者の間で注目されていたようである。発表内容は、結婚の様々なパターン、妊娠中の悪いパターン、育児に悩む母親やその心の変化のパターンなどを中心にしてオムニバス風に繋げ、最後に保健婦などを通して親子教室や仲間作りの場を知り、心を開いて周りを見渡すとこんなに多くの支持の手があるのだ、といったものである。企画原案の出された3月から、実行委員会を作り準備会を重ね、出演保健婦達の「りんどうの会」のメンバーと、ストーリー、脚本作り、作曲、場面構成とセリフ、歌、動きなどすべての創作をし、発表に臨んだ。発表は思いがけなく大成功で終わったが、これはメンバーの努力以外にも様々な協力があつたお陰である。まず、このようなチャンスと援助を与えてくれた長野県、練習場所の提供と学生の合唱隊への参加協力をしてくれた長野県公衆衛生専門学校、メンバーの練習への参加を快く許してくれた各保健所、また、当日の照明、舞台関係の一切を高度なレベルで担当してくれた長野舞台など、多くの援助があつたからである。また、メンバーは自分から自主的にではなく、上司から言われてしぶしぶ参加したというのが実態で、それは第一回目の顔合わせのときの記述からも分かる。創作過程ではメンバーの様々な悩みや葛藤があつたにもかかわらず、発表前後での変容は見事であり、創作オペレッタの活動が観客にアピールするためだけではなく、メンバー自身の人間的な成長を促したということが分かった。創作過程での心理状態を追って見ると、“やらせられている”から“自主的にやる”への変換点の存在があつた様に思われる。それは、本気で自分ときちんと向かい合い、見つめ、考えることが出来たときであり、そこから変容が始まったように思う。そこに至るまでには悩み、苦しみ、葛藤するといった体験がどうしても必要であり、また、それを通して新しい自分を発見していくということが実証された。しかし、それまでにはメンバーは多くのプレッシャーをくぐり抜ける必要があつた。記述から見ると、一つは、まだ納得がいかないうちに長野県県民文化会館大ホールでの練習が組まれたこと、二つ目は、新聞記事に載り、外から期待されていることを意識し出したことである。この“なんとかしなければ”という気持ちを持つことが、自分自身との対決であり変容への兆しでもあつた。三つ目は、セミプロによる演技指導を一回待たせたことである。メンバーの中に“知りたい”気持ちが深まったときに、初めて吸収力が強まることを、筆者は経験的に知っていたからである。過去何年もの間、本務校及び非常勤校で創作オペレッタを学生達と何作も作り上げた過程には、必ずと言っていい程そういうポイントがあつた。今回の演技指導では、もっと早い方が良かったという声も

あったが、一回遅らせたことは意図的なものであり、成功したと考えている。以上三つの実施時期は、全体指導をする筆者が短期間でオペレッタを仕上げるために意図的に設定したものである。このようにして、メンバーは主体的にオペレッタに取り組み、通勤途中でも練習する程のめり込んでいった。そして、自信を持って発表に臨んだが、緊張しつつも観客の反応を楽しむ余裕も持ち合わせ、全員が「舞台に立つのはなんと気持ちが良いことなんだろう」と言うまでになった。省みれば、初顔合わせのときの他人事のような感じと、二ヶ月後の発表時のあの燃えるような感じとでは雲泥の差がある。終了後のアンケートには、殆どの人が「またやりたい」「保健活動に取り入れたい」と記述した。そこからは、苦勞して作り上げた経験を通して、やる前には考えられなかった価値観を持つようになっていく様子が読み取れる。

筆者はこの活動をアトラクションとして単なる余興に終わらせたくなかった。出来るならば、観客にも母子保健や家族のことに関心をもってもらいたかったし、同時に出演者の人間的成長も望みたかった。その両方を実現するには、保健婦による創作オペレッタしか考えられなかった。幸い、長野県公衆衛生専門学校での実践がある程度知られるようになっていたので、それが根底になって企画出来たように思う。長野県公衆衛生専門学校での創作オペレッタはドラマ教育の範疇のものであるが、今回は社会人としての保健婦達がシアター教育として挑戦したものであり、あくまでも観客に自分達の考えを伝えたいという意図のもとに組み立てられたものである。演劇教育には、人に見せるために演じる劇教育（シアター教育）と、人に見せるためではなく演劇の要素を利用して教育に役立てようという方法（ドラマ教育）の二つの方向があるが、両者共多くの共通点を持ち、教育方法としては有効な手段であることを、今回の実践でも確信出来た。保健婦の仕事内容は地域における健康相談、健康教育、健康診査、訪問指導、地区管理、住民の検診、衛生教育などと多岐にわたっており、切りのない仕事とも言えるが、今回の実践は、仕事上の衛生教育の一環としての活動でもあっただろうし、自分自身を育てる生涯学習としての意味もあったのではないかと筆者は考えている。オペレッタのような総合的活動は、その両者の期待に応えるだけの幅広さを包含しているため、今回のような衛生教育としてだけでなく、その他の保健医療や看護の分野でも有効な表現手段となり得る可能性を秘めていると言えよう。

〈参考文献〉

- 北村恵子「創作オペレッタの作り方」樹芸書房 1988
北村恵子「いま表現を考える」音楽広場6月号 クレヨンハウス 1993
北村恵子「創作オペレッタ実践の意義」上田女子短期大学紀要7号 1984
北村恵子「幼児教育者養成における創造的音楽学習の効果」上田女子短期大学紀要10号 1987
北村恵子「豪州タスマニア州の MUSIC IN PRIMARY SCHOOLS について」上田女子短期大学紀要 13号 1990
北村恵子「幼児のオペレッタ作りにおけるドラマ教育的考察」上田女子短期大学紀要14号 1991
北村恵子「音楽表現作品発表会についての一考察」上田女子短期大学紀要15号 1992
北村恵子「ドラマ教育と創造的音楽学習」上田女子短期大学紀要16号 1993